さらばリーマン 41

2004年の新潟県中越地震で被害を受けた池谷集落。この地に、都会での安定した暮らしをやめ、妻子を連れて移住した33歳の若者がいる。稼ぎぶちを自分でつくるという気持ちがあれば、誰でも田舎暮らしは可能だと力強く言い切る。

溝口 敦

多田朋孔さん（33歳）のお宅はそれほど山深くない。新潟県十日町市。十日町駅には特急が止まるし、駅からは車で20分ぐらい。

冬には道の両側に3～4㍍ほど雪の壁ができるそうだが、多田家の前の道路には除雪車が入って、車の通行には不自由しない。過疎の集落で、多田さん自身が「地域おこし協力隊」の地区担当というから、人里離れた山奥を想像していた。

家は広い。2階建てで6部屋もある。玄関から上がってすぐの部屋など15畳と広い。古びてはいるが、都会の住まいと違って広々としている。集落の持ち物で家賃が3万円。が、補助が3万円出て、実質的にタダ。畑は5畝（150坪強）でむらの人からタダで借りている。畑でありとあらゆる野菜を少しずつ栽培し、ほとんど買う必要がない。田は4反（約40㌃）借りているが、傾斜のきつい棚田には「中山間地直接支払制度」という補助があり、それがそのまま地主に回って実質タダという。

多田さんが住む池谷集落には1955年ごろ37戸、170人以上が暮らしていた。隣には入山という集落もあり、池谷と入山に住む子供たちのために小学校の分校があった。

高度成長期に都会への人口流出が始まった。農林業の経営が難しくなり、副業の機織りも低迷した。2004年には新潟県中越地震が起き、戸数がさらに減って耕作を止める人さえ出た。池谷は現在戸数8戸、住民が18人。お年寄りが多い。入山は89年最後の1戸が離村して集落は消滅している。このままでは人口減で池谷も廃村になってしまう……。

全国にこういう廃村一歩手前の集落がいくつもある。そこで総務省が「地域おこし協力隊員制度」を始めた。都市圏の住民が1～3年程度、地域に住民票を移して農林漁業を応援し、水源保全など地域協力を行う。そうした活動を応援するため、3年を限度に年間200万円の給料と活動費を支給する。4年目からは各自、自活し、むらに根をおろしていく。

多田さんもこの制度を利用し、去年2月一家で池谷に移住した。

話を聞いて、なるほどこういう生き方も悪くないなと思える。都会であくせく暮らすより、よほど人間らしい生活が送れそうだ。むらの人にとっても、日本国民の立場からも、山村を廃村にしたくない。山の暮らしが成り立ってこそ、日本の多様性という豊かさが保たれるのだ。

今の社会、いろいろ制度疲労を起こしている。都会でサラリーマンをやっていて、ほんとに大丈夫なのか、漠たる不安がある。自給自足に近い生活の方が人間の本来なのではないか……。多田さん自身が3年前、リーマンショックを目の当たりにして、こう思ったという。

エリートになろうと思えばなれた人である。嗅覚というか本能というか、それに導かれて今の山里生活を選び取った。

いっそのこと会社が潰れてしまえばいい

1978年大阪生まれ。父親は建設会社に勤め、弟が1人いる。府立大手前高校から1浪して97年京都大学経済学部に入った。中学で陸上の短距離をやり、高校でサッカー、大学では応援団のブラスバンド部だった。第44代の京大応援団長にもなっている。一貫して体育会系で通し、健康には自信がある。

多田朋孔さん

世界史、中でも中国史、特に項羽と劉邦の時代が好きで、京大を卒業するころには文学部に転部していて考古学を専攻、卒論では当時の人々の生活を語る糞石と格闘した。

つぶしの利く経済学から就職先も稀な考古学へ。大学を出た後、何をして働くか、まるで考えていなかったと語る欲のなさである。こせこせした時代には珍しいおおらかさ、自然体といえよう。

応援団では先輩に酒を飲まされた。人前で話す機会も多かった。酒も話も苦手意識はなく、今の生活に役立っている。むら人も酒が好きだ。

1年留年して02年京大を卒業、中堅・中小企業やベンチャー企業を支援する東京の会社に就職した。「自分が生涯ずーっとサラリーマンをやるとは考えられなかった。いつかは独立して何かやるかも知れない。会社は『企業家輩出機関』をスローガンに掲げていましたから、仕事をしながら勉強できると考え、入社した。しかし入ってみると様子がちがう。起業家を探して起業を成功させるより、フランチャイズの加盟店探しに精を出す。加盟した人が収める加盟金が折半になるため、それが収入の柱になっていた。ぼくらのやる仕事は加盟店の獲得で、営業でした」

配属は福岡支店だった。会社は上場していて入社当時、株価は2000円だったが、徐々に下げ、辞めるころには200円に下がっていた。

加盟店を集めないと、うちがつぶれるんだ、と上司にいわれ、いっそのことつぶれてくれればいいとさえ感じた。意地があり、自分から辞めると言い出したくはなかった。会社は辛うじて持ちこたえた。

2年目、多田さんはスーパーバイザーになった。美容院向けのコンサルタント育成や、加盟店へのフォローが仕事で、実績を上げ、褒賞でハワイ観光に行けた。「やってみたが儲からないなど、クレームもあるわけです。仕事をこなしているうちにコミュニケーション能力が上がり、いざこざが起きても話し合えば分かるってことが分かってきた。それと、どこも経営が厳しく、お金の取り合いをやってる社会があるんだってことを実感できました」

健康である限り仕事はある

5年間勤めて07年29歳で退職した。会社のダーク面も見て、もういいと思ったのだ。前年には結婚し、奥さんは最初の子供を身ごもっていた。京都大学応援団の同期である。多田さんはすぐコンサルティング会社に再就職した。大企業向けに社員研修や組織開発を手掛ける会社で、毎年売上の1％を社会貢献活動に寄付していた。

会社の寄付先の一つにNGOのJENがあった。旧ユーゴスラビアやアフガニスタン、イラク、パキスタン、スリランカ、スーダン、ハイチ、新潟、宮城などで支援活動を行っている団体である。JENは04年の中越地震以来、池谷、入山集落に入って支援を続けていた。

多田さんも池谷に通い、ボランティア活動に従っていたが、「地域おこし協力隊制度」を村でも活用しようとしているとの情報を入手し、池谷に協力隊員として移り住もうと考えるようになった。

多田さんは移住に乗り気だったが、奥さんがなかなかOKを出さなかった。会社に勤めていれば月50万円の給与のほかボーナスがもらえる。2歳になる子供もいた。子供の教育とか病気とか、あれこれ考えれば、都会を離れたがらないのは当然だろう。

多田さんは事実が説得してくれるはずと信じて、奥さんと一緒にせっせと池谷に通った。ぼろぼろだった今の住まいを、むら人や集落に通うボランティアが修繕してくれた。多田さんも奥さんもこうした様子を見て、むらの人は本気なんだと感じた。本当にぼくたちに入ってもらいたいんだ、と。情にほだされというのか、奥さんもついに池谷移住にうなずいてくれた。

去年2月、多田さん一家3人は雪深い池谷に移住した。地元には正社員の仕事がないだけで、冬には屋根の雪下ろしや雪を捨てる肉体労働がある。健康であるかぎり仕事はあるのだ。雪が解ければ、それこそ「隣百姓」で、隣の人をマネして畑に作付けし、春には棚田に水を入れ、稲を植え、田の草取りをする。子供は集落の中でただ一人の子供だから、村中の人が可愛がってくれる。「自分でここで稼ぎぶちをつくるぞという気持ちさえあれば、誰でも十分やっていけます」。多田さんは力強く言い切る。むら人からの信望も厚い人にちがいない。 Ⓦ

〔みぞぐち・あつし〕ノンフィクション作家、ジャーナリスト。1942年東京都生まれ。主として日本社会の暗部である暴力団や新宗教に焦点をあてて執筆活動を続ける。『食肉の帝王―巨富をつかんだ男 浅田満』で第25回講談社ノンフィクション賞受賞。